

# 生活

✉seikatsu@asahi.com

## 患者を生きる

3081

### ある日突然

#### ハチ毒アレルギー①

場を離れた。  
「痛っ！」

2014年5月下旬、関東地方に住む女性(50)は、夫(53)が営む養蜂場を回っていた。これまで現場に出ることはなかったが、人手不足のため、収穫期を迎えた約1カ月前から巣箱のミツの採取を手伝っていた。

「足手まといにならないかと、緊張する毎日だった」

飼育しているのはセイヨウミツバチ。春から巣箱の半径2〜3メートルを飛び回り、アカシアやエゴ、クワなどのミツや花粉を巣箱に集める。竹やぶや林など約20カ所に置

いた計約260箱の巣箱から6月末まで採取を続ける。性格のおとなしいミツバチでも、巣箱に近づくと攻撃的になる。作業中は、顔を守る網付きの

麦わら帽子をかぶり、長靴に厚手のゴム手袋を身につけていた。それでも時々、針がゴムを突き抜けて、手足を刺された。

この日は、夫婦のほかに、臨時で雇った作業員5人も加わっていた。女性は巣箱から巣枠を取り出し、びっしり付いたミツバチをブラシで払い落とす作業にあたって

### 「痛っ」休憩中採取ミツ

いた。ハチが残っていると、遠心分離機にかけるベテランの作業員から「掃き足りないぞ」と怒られた。ていねいに払っていると、「遅い」と言われた。

全員で巣箱から7分ほど離れた草地で休憩していると、3〜4匹のミツバチが向かってきた。威嚇を示す激しい羽音を立て、周辺を回り始めた。

みな麦わら帽子を外していたが、女性以外は気にしていなかった。1匹が女性に近づいてきた。刺激を与えないよう、静かにその



自宅敷地内にある養蜂場。巣枠にはミツバチがびっしり群がっていた

いままでにならない激痛が走った。マスクの上から唇の左上を刺されていた。ほおが腫れてくるのがわかった。痛みをこらえながら作業をこなした。

夕方、帰宅しても痛みはひかず、頭がぼろっとしてきた。鏡を見ると、首の部分に赤いじんましんが出ていた。夫に「体調がおかしい」と伝え、約4時間離れた病院へ車で向かった。

病院の待合室で長いすに座っていると、汗があふれてきた。「おかしい」と思った矢先、気を失った。

◆5回連載します。

(石塚広志)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、  
iryu-k@asahi.comへお寄せください。



「患者を生きる」は、有料の医療サイト・アピタル(<http://www.asahi.com/apital/>)で、まとめて読めます。

# 生活

✉seikatsu@asahi.com

## 患者を生きる

関東地方に住む女性(50)は2014年5月、夫(53)が営む養蜂業を手伝っていてミツバチに顔を刺され、病院の待合室で気を失った。速のく意識の中で、慌てた看護師の声が聞こえ、車いすに乗せられて診察室へ運ばれていくのがわかった。

意識障害などを起こす重いアレルギー症状「アナフィラキシーショック」と診断された。ハチに刺されたときに体内に入ったハチ毒が原因だった。ハチ毒によるアナフィラキシーショックは、年間20人前後が国内で亡くなっている。症状を抑える薬の注射や、抗ヒスタミン薬の点滴を受けると、意識が戻ってきた。その日は大事を

## また刺されると命の危険

3082

### ある日突然

### ハチ毒アレルギー②

取って入院することになった。翌日の退院時、ほおは虫歯になったように腫れたままだった。

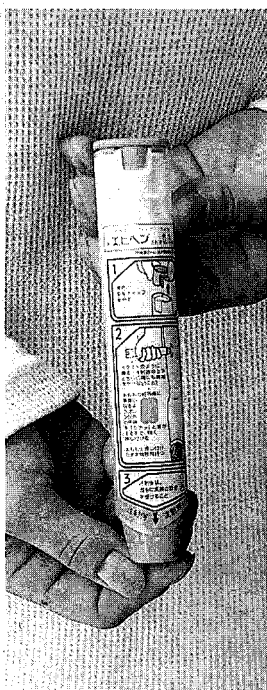
「今後、どんな治療が必要になるのでしょうか」と救急医に尋ねると、ハチ毒アレルギーの専門医がいる独協医大病院(栃木県壬生町)を受診するよう勧められた。

3日後、紹介状を手に呼吸器・アレルギー内科に向いた。血液検査でハチ毒の抗体の有無を調べ

たところ、ミツバチが陽性で、スズメバチとアシナガバチは陰性だった。

「ミツバチにもう一度刺されると、命に関わる可能性もある。養蜂の仕事は避けたほうがよいでしょう。家族でよく話し合ってください」

診察した平田博国講師(46)に告げられた。ハチに刺された人の一部は、ハ



女性が携帯している自己注射薬「エピペン」

チ毒に対する抗体ができ、再び刺されると抗体が過剰に反応して重いアレルギー症状が出る可能性がある。女性は養蜂を手伝う中でミツバチに刺されるうちに、抗体がつくられていたとみられるという。

自己注射薬「エピペン」を持ち歩くよう指示された。刺されたときに応急処置として使うためだ。

「花粉や食物のアレルギーはなののに、家業であるハチにアレルギーを持つなんて……」。女性は落ち込んだ。帰宅後、夫に「しばらく養蜂場には行けない」と話した。夫は「まさか妻が」と驚いていたが、受け入れてくれた。

家業を手伝えない後ろめたさを感じながらも、意識を失った怖さから、いまも巣箱には近づけないでいる。

(石塚広志)

# 生活

✉seikatsu@asahi.com

## 患者を生きる

3083

### ある日突然

### ハチ毒アレルギー③

相模原市緑区（やまがはら）の山崎正志（やまざき）さん（69）はハチ毒アレルギーがあり、体質を改善して根治を目指す免疫療法を続けている。

建築業を営みながら、趣味で養蜂もしている。1997年1月、飼っていたニホンミツバチに左耳を刺され、ショック症状を起こした。近くの診療所に運ばれ、上の

血圧は40台まで下がった。点滴などを受けて正常値に戻ったが、医師には「今度、ハチに刺されたら命取りになる」と言われた。

この年の秋ごろ、妻の隆子（たかこ）さん

（66）が、栃木県壬生町にある独協医大病院で取り組むハチ毒アレルギーの免疫療法を紹介するテレビ番組を偶然見た。原因となるハチ

毒成分を少しずつ注射して体を慣らし、ハチに刺されてもアレルギー症状が起らないように体質を改善させる方法という。

「お父さんも治せるかもしれない」。隆子さんはすぐに病院に問い合わせた。

同年11月、山崎さんはアレルギー内科（当時）を受診した。血液検査でハチ毒の抗体を調べるとミ

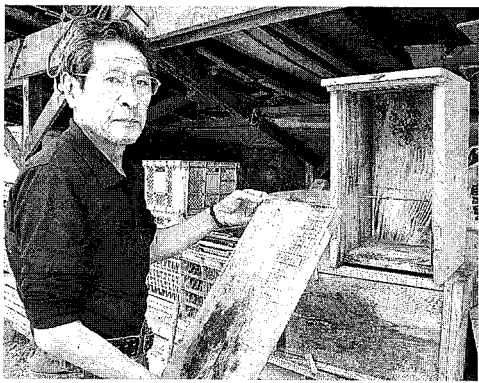
## 免疫療法で体質改善

ツバチだけでなく、スズメバチやアシナガバチも陽性だった。

治療では、注射するハチ毒成分の濃度や量を徐々に増やしていく。免疫療法の副反応で、重いアレルギー症状の「アナフィラキシーショック」を起こす危険があるため、入院することになる。山崎さんは仕事の状態を見ながら、翌98年5月に入院した。

通常は1〜2週間で退院できるが、山崎さんは皮膚テストで強い反応があり、濃度をかなり薄めてスタートした。担当医の平田博国

講師（46）は「水に近い状態から打ち始めるので、入院が長くなると



山崎正志さんが自らつくったハチの巣箱。相模原市緑区

思います」と話した。アレルギー症状はほとんど出なかったものの、退院までに1カ月かかった。

退院後の5年間は4〜6週間に1回、その後は2カ月に1回、いまも3カ月に1回、注射を受けている。現在、同病院は専門医の不足などからハチ毒アレルギーの患者を新たに受け入れておらず、山崎さんのようにその前から治療を続けている患者しか診ていない。

山崎さんの自宅から病院までは約150キロ。車で2時間以上かけて通い、隆子さんに付き添ってもらっている。往復する間は、夫婦水入らずの時間だ。（石塚広志）

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、[iryu-k@asahi.com](mailto:iryu-k@asahi.com)へお寄せください。



「患者を生きる」は、有料の医療サイト・アピタル(<http://www.asahi.com/apital/>)で、まとめて読めます。

# 生活

✉seikatsu@asahi.com

## 患者を生きる

3084

### ある日突然

#### ハチ毒アレルギー④

ハチ毒アレルギーのある相模原市緑区の山崎正志さん(69)は、独協医大病院(栃木県壬生町)の呼吸器・アレルギー内科に通っている。1997年、趣味の養蜂中にミツバチに刺されてショックを起こした後、根治をめざし、原因のハチ毒成分を少しずつ注射して体を改善させる免疫療法を続けている。

「次に刺されたら命取り」。刺された直後にそう言われた。このため、養蜂は巣箱の作製や設置だけにし、ミツの採取は友人に任せ

て、ミツバチのいる巣箱には近づかないようにしていた。

昨年5月、置いていた巣箱から女王バチが半数ほどの働きバチを引き連れて出て行く「分蜂」を見つけた。友人に頼んで新しい巣箱を置いてもらい、その作業を数回離れて眺めていた。1匹のミツバチが向かって来るのに気付かず、右手の指を刺された。

「これまでの治療の効果で、大丈夫なことはわかっていた。焦りはなかった」

指がわずかに腫れただけで、ア

## 刺されても腫れただけ

レルギー症状は出なかった。病院にも連絡しなかった。

自宅は山あいに位置し、周辺には溪流やキャンプ場などがある。熊や猿、鹿も出る。山崎さんは養蜂のほかに、狩猟やキノコ狩りなどもする。射止めたものを剥製にした専用部屋もある。

免疫療法を続ける中で、新たな趣味も加わった。サツキの栽培だ。この治療を始めるために約150日離れた独協医大病院に1カ月入院した際、外出時に近くのサツキ園に入って魅せられた。

通院のたびに夫婦で立ち寄り、店主と顔なじみになった。狩猟で



自宅の庭にはサツキの盆栽が並ぶ。相模原市緑区

得た肉や川魚を持参し、お礼にサツキを譲ってもらうこともあった。いま、自宅の庭には約20鉢が並ぶ。自慢は購入した樹齢80年以上のもので、「俺より年上だけど、立派だろう」。

飼っているニホンミツバチは、さまざまな花からミツを集める。1シーズンで多いときは一升瓶3本分のハチミツがとれる。「味が濃厚で、一度味わうとほかのハチミツは食べられない。いつも友人たちに配るんだけど、これが喜ばれるんだよ」

治療はまだ続く。養蜂もやめられないという。(石塚広志)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、[iryoy-k@asahi.com](mailto:iryoy-k@asahi.com)へお寄せください。



「患者を生きる」は、有料の医療サイト・アピタル(<http://www.asahi.com/apital/>)で、まとめて読めます。

# 生活

✉seikatsu@asahi.com

## 患者を生きる

3085

### ある日突然

#### ハチ毒アレルギー⑤情報編

厚生労働省の人口動態統計によると、ハチ（スズメバチやミツバチなど）に刺されて死亡したのは2014年が14人で、13年は24人、12年22人と例年20人前後に上っている。国内では、命を奪う危険な生物の一つとされる。

後には意識を失い、30分以内に死に至ることがある。体内に抗体ができなければ、刺された部位の痛みやかゆみ、腫れですむ。

死因となるのが、呼吸困難や意識障害などを伴う重いアレルギー症状「アナフィラキシーショック」だ。ハチに刺されると体内にハチ毒に対する抗体ができ、再び刺されると過剰なアレルギー反応が出る。血圧低下が起こり、数分

後には意識を失い、30分以内に死に至ることがある。体内に抗体ができなければ、刺された部位の痛みやかゆみ、腫れですむ。

独協医大の平田博国講師（呼吸器・アレルギー内科）によると、ハチに刺される人の半数近くは林業や建設業、ゴルフ場従業員、農業などに携わっている。だが、こうした人たちでも、ハチ毒アレルギーの怖さを理解している人は少ないという。

平田さんは昨年12月、今年2月、栃木、群馬、埼玉3県の養蜂

## 命落とす危険 認識を

農家を対象に、ハチ毒アレルギーに関するアンケートと血液検査を実施した。参加した113人のうち、35人が刺された後にじんましんや呼吸困難などの全身症状を起こした経験があった。35人のうち31人が、血液検査でミツバチのハチ毒の抗体が「陽性」だった。次に刺されると、ショック症状で命を落とす危険がある。しかし、アレルギーの診断を受けている人はわずかだ。応急措置で使う自己注射薬「エピペン」を持っているのは9人しかいなかった。

「業界をあげて危険性を知らせてほしい」と平田さんは話す。

連載で紹介した相模原市の山崎正志さん(69)が受ける免疫療法は、ハチ毒成分を徐々に注射し、



### ハチから身を守るには

- 長そで、長ズボンを着用する
- 白か黄色の服装、帽子を着用(黒い部分の露出を避ける)
- 殺虫スプレーを携帯
- 一度刺された人は血液検査でアレルギーの有無を調べる
- 「陽性」の人は自己注射薬「エピペン」を常備する
- 巣を作りやすい場所(生け垣や茂みなど)を避ける

また、この治療は欧米の多くの国では公的医療保険が使えるが、日本ではスギ花粉とダニによるアレルギー性鼻炎にしか認められていない。このため、数十万円の自己負担が必要となり、定期的に打つ注射も1回5千円かかる。日本アレルギー学会は、ハチ毒への保険適用を厚生労働省に求める方針という。

(石塚広志)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、[iryu-k@asahi.com](mailto:iryu-k@asahi.com)へお寄せください。



「患者を生きる」は、有料の医療サイト・アピタル(<http://www.asahi.com/apital/>)で、まとめて読めます。